

インプラントに取り組む女性歯科医の活躍が 国民の口腔内の健康と食生活を守る

欠損部位における標準的治療として浸透しているインプラント治療。そのニーズも年々、高まりを見せているが、一方で、トラブルなども少なくない。日本歯科大学附属病院の教授で、インプラント専門医の柳井智恵氏は、治療の質の向上、さらには今後、ますます進展する超高齢社会に対応するためには女性歯科医の活躍が重要だと考え、WDAI (Women Dental Academy for Implantology) を組織した。柳井氏に現在のインプラント治療における現状と課題、WDAIの役割や展望などについて話をうかがった。



柳井智恵

日本歯科大学附属病院
口腔インプラント診療科 教授
WDAI 会長

聞き手／
本誌編集委員
田島隆雄

Yanai Chie

1988年、日本歯科大学歯学部卒業。1993年、同大学大学院歯学研究科卒業博士学位取得。1994年、同大学口腔外科第1講座助手。2003年、同大学附属病院口腔外科診療科講師。2005年、スイス・ベルン大学医学部頭蓋顎顔面外科学講座に留学。2011年、同大学附属病院口腔外科診療科准教授。2015年、同大学附属病院口腔インプラント診療科教授。現在に至る。2016年、WDAI会長。

女性歯科医の育成・活躍が 今後のインプラント治療の課題

—近年、インプラント治療については、歯科医療の標準的な治療の1つとして認知されており、専門病院だけでなく歯科クリニックでも提供しているところが増えていきます。まずは、この現状について、どのように見ておられますか。

柳井 インプラント治療は、歯科医療に本格的に導入された1960年代以降、欠損部位に対する治療法の1つとして日本でも確立されてきました。そのことは歯科業界全体の共通認識であり、また国民の知名度においても年々高まりを見せています。

こうしたなかで、この10年間は特にインプラント治療の件数が増えています。厚生労働省の「薬事工業生産動態統計調査」によると、リーマンショック前の2006年は96万8,355個でしたが、2013年は116万4,414個で、約20万個増えて

います(図①)。

また、厚生労働省の歯科治療における需要の動向についての調査結果を見ると、今後、需要の増加が見込まれる歯科医療の分野の第2位としてインプラント治療があがっています。国民のQOL向上と高齢者の増加がその主な理由です。ちなみに、第1位は「予防歯科」、第3位は「高齢者に対する治療項目」となっています(図②)。

インプラント治療のニーズの高まりに対して、歯科業界としては、適切に応えるべく、さらに質を向上させていかなければなりませんし、担い手の拡充ということにも取り組んでいかなければならないと考えています。

では、担い手側である歯科医の状況はどうなっているのか。注目してほしいのは、今、女性歯科医が増えているということです。厚生労働省の「平成28年(2016年)医師・歯科医師・薬剤師調査の概況」によると、歯科医の総数101,551人に対し、女性は23,391人です。現在、その割合は23%程度に留まっていますが、前年比では、男性歯科医が減少している一方で、女性歯科医は956人も増え

ています(4.3%増)。歯科大学に目を向けると、学生の半数を女性が占めるところも珍しくありません。また、近年の国家試験の合格者を見ても約40%は女性という状況です。

このように、女性歯科医の数は年々、増加傾向にあり、総数の半数を女性歯科医が占めるという時代もすぐそこにきているのです。ところが、インプラント治療に取り組む女性歯科医は非常に少ない現状にあります。インプラント専門医となればなおのことです。

私は、インプラント関係の国際学会に所属しているのですが、そこでの女性の割合は約23%。この数字はアジアの関連学会でも大体同じ比率です。しかし、日本のインプラントの関連学会の女性会員の割合は約8%なのです。しかも、その割合は10年前とほぼ変わっていません。

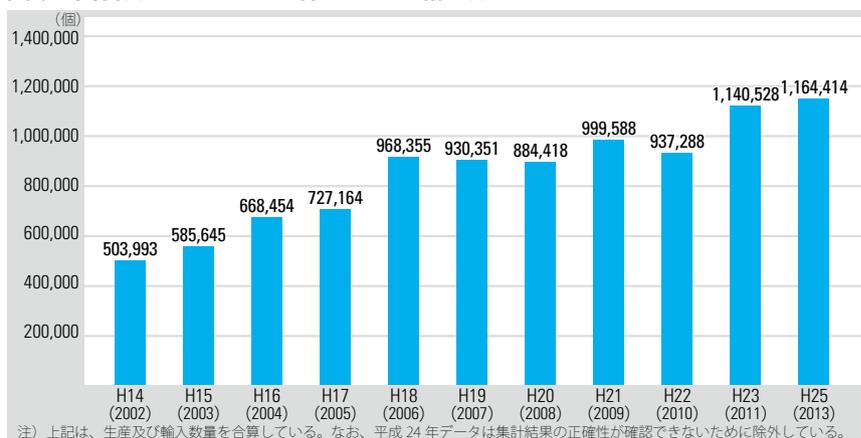
これからの歯科医療、さらにはインプラント治療の質の担保、ニーズへの対応を考えれば、女性歯科医をいかに育成し、活躍してもらうのが大きな課題になっていると強く感じています。

—インプラント治療に取り組む



本誌編集委員 田島隆雄

図①：歯科用インプラント材の生産・輸入数量



出典：薬事工業生産動態統計調査

女性歯科医が増えない理由は何でしょうか。

柳井 さまざまな要因が重なっているわけですが、1つはやはり男女のワークライフバランスの違いでしょう。女性には出産、育児などのライフイベントがあり、それにもとない現場を長期間、離れることとなります。現場に戻るには、ブランクを埋めるために学び直さなければなりません。すると、より特殊な知識やスキルが必要となるインプラント治療には取り組みにくいということがあると思います。

もう1つは、女性の性格的な面です。インプラント治療というのは口腔外科の領域で「骨を削る」「インプラントを入れる」といった技術が必要になります。こうした外科治療そのものに苦手意識を持っていることも確かです。

しかし、実際、インプラント治療は、骨を削ったりするだけではありません。補綴装置をつくったり、修復したり、治療後のメンテナンスを行ったりすることも大事な部分で、そこに関しては専門知識があれば、特殊なスキルがなくても対応できます。さらにいえば、

外科的治療においても、困難症例は別にして、一般的な症例であれば、適切な研修プログラムを受けることで対応が可能なのです。

そういう意味では、苦手意識を払拭し、まずは取り組んでみる、学んでみるという姿勢が重要になると考えています。

WDAIの創設で女性歯科臨床家を支援

— そのようななか、柳井先生は2016年4月に、「WDAI」(Women Dental Academy for Implantology) という組織を立ち上げました。その目的についてお聞かせください。

柳井 WDAIは、インプラント治療を主軸とした包括的臨床を志す、すべての女性歯科臨床家(歯科医・歯科衛生士および歯科技工士、その他すべての歯科関係者)の研修、活躍の支援を目的とした学術団体です。

現在、立川敬子先生(東京医科歯科大学)、田中道子先生(鎌倉市開業)、渥美美穂子先生(横須賀市

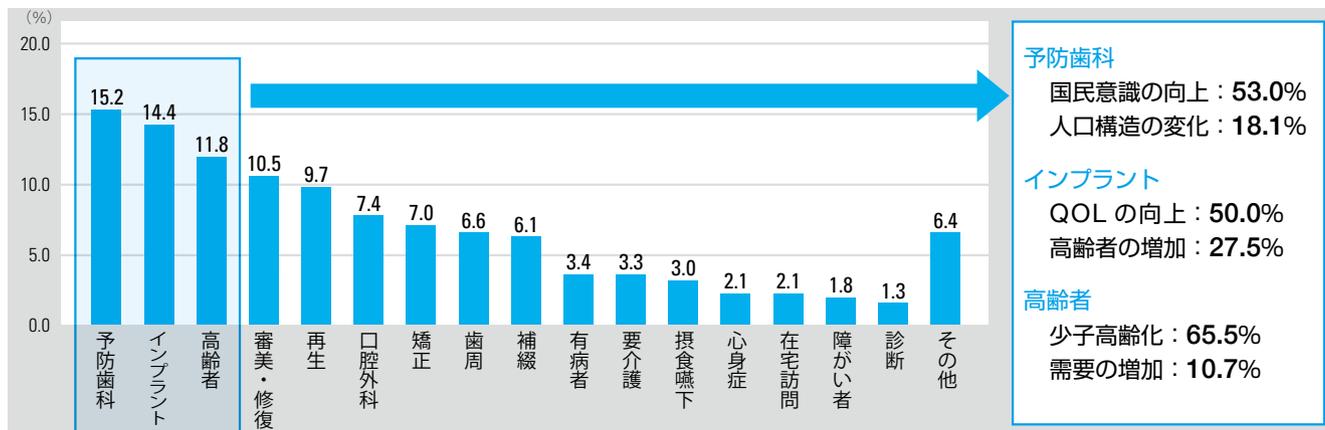


開業)と私の4人がリードチームとして運営しています。

活動内容は、インプラント治療を中心とした研修会の開催です。ここでは座学だけでなく、実習も行っています。また、研究論文の発表を行う「学術定例会」なども開いています。

インプラント治療に興味があるからといって、いきなり専門医を

図②: 今後の需要の増加が予想される歯科医療の分野



出典: 「新たな歯科医療需要等の予測に関する総合的研究【平成17年度厚生労働省科学研究】」 ※国内の有識者・関係者を対象にしたアンケート調査結果

取得するというのは簡単ではありません。当研修会を受けていただき、専門医になるための前段階として、基礎的な知識と技術を身につけてもらいたいと考えています。また、産休や育休で現場から長く遠ざかっていた女性歯科医に対し、そのブランクを埋める場としても活用していただきたいです。さらにその門戸は、女性歯科医に限定せず、歯科衛生士、歯科技工士、歯科助手など、歯科医療に関係するすべての職種に開いています。歯科医療は歯科医だけで成り立つものではありません。多職種が密に連携することで、より質の高い、患者さんに満足いただける歯科医療が提供できるわけです。

——現在、会員数はどれくらいおられるのですか。

柳井 創設2年で約200人です。支部は東京と名古屋の2か所ですが、現在、福岡と札幌に新たに支部を設置する計画が進んでいます。会員のほとんどが関東圏に集中している現状ですが、将来的には全国に広げていきたいです。

喫緊の課題は、やはり会員数の増員です。そのためには、WDAIの周知活動の強化と、研修プログラムの質の向上、あとは講師を務めることができる人材の確保が必要になると考えています。

——WDAIが創設されてから約2年となりますが、現状までの成果等については、どのように見ておられますか。

柳井 歯科業界全体として、以前から、潜在的に女性歯科医の活躍という問題は抱えていました。そうしたなか、WDAIが実際に活動

を進めたことで、その問題が顕在化され、他の歯科関係学会等においても、「女性歯科医の活躍」というキーワードが出てくるようになったと感じています。

今後は、そこから一歩進んで、「女性歯科医の活躍の機会をつくる」という具体的な動き、よい連鎖反応につながれば嬉しいです。

インプラントとメンテナンスはセットとして捉えるべき

——インプラント治療のニーズが高まる一方、そのトラブル事例も少なくないと聞きますが。

柳井 インプラント治療の件数が増えたことにとともに、そのトラブルが一時、急増したことは事実です。こうした実態を踏まえ、関連学会や大学病院等の教育機関では、その注意喚起に努め、いかにトラブルを減らすかということに力を入れてきました。

その成果もあり、また歯科用CTなどの最新医療機器の導入・進化によって、近年、トラブル数は減少傾向にあります。とはいえ、それでも一定割合で起きていることは否定できません。

——実際、どのようなトラブルが多いのでしょうか。

柳井 2017年の日本顎顔面インプラント学会の調査によると、最も多いのは、主に上顎の奥歯のインプラント治療後に起きる「上顎洞炎」となっています。これは、上顎の骨は薄いので、骨をつくってインプラントを入れるのですが、その際、上顎の上にある上顎洞と呼ばれる空洞部分に炎症が起きるものです。

次に多いのが「神経損傷」です。下顎の治療の際、何らかの原因で神経を傷つけてしまい知覚過敏のような症状が起きるものです。

あとは「迷入」と呼ばれるものです。上顎洞にインプラントや造骨材などが入り込んでしまい炎症を起こすというものです。

——トラブルの発生と歯科医のスキル等には相関関係があるのでしょうか。

柳井 どんなにスキルが高い歯科医が治療をしてもトラブルが起きてしまうことはありますが、歯科医の技術に関係する部分もあります。たとえば、骨をつくる技術は難しいので一定のスキルがなければ炎症などを起こしてしまいますし、画像診断能力にも大きく関係してくるでしょう。

また、トラブルという意味で重要なのが定期的なメンテナンスです。メンテナンスが適切に行われないことで、炎症が起きることもあります。異常が起きていることがわからず、気がついた時には重篤な状態になっていたということも少なくありません。

私は、患者さんがインプラント治療を選択した時点で、定期的なメンテナンスもセットで約束するものだと捉えています。

今後、急増する在宅ニーズに対応するのが女性歯科医

——近年では在宅医療が少しずつ地域に浸透しています。在宅で療養する高齢者のなかに、インプラントを入れている人が増えてくるとも予測されます。今後は、その対応も重要になりますね。

柳井 そのとおりです。昨年、日本口腔インプラント学会、日本老年歯科医学会、補綴歯科学会が共同で、訪問歯科診療におけるインプラントの実態調査を行いました。それによると、現在、在宅で療養する高齢者の約3%がインプラントを有しているという結果になっています。しかし、これはあくまでも現時点の数値。インプラントを入れた人が高齢となり在宅で生活するようになれば、この数値は近い将来、急増するわけです。

しかし、歯科業界全体としてその準備ができていません。インプラントの知識やスキルを持った訪問歯科医を早急に拡充しなければ、対応できなくなるのです。

今、訪問歯科診療を行っているすべての歯科医がインプラントの知識等を持っているわけではありません。逆に、インプラントの知識等を有したすべての歯科医が訪問歯科診療を行っているわけでもありません。インプラントの知識等を持った訪問歯科医の割合をどう増やしていくか。私は女性歯科医こそ、その役割を担うべきだと考えています。

WDAIの将来的な目標は 男女関係なく次世代の育成

——WDAIのこれからの展望、役割等についてお聞かせください。

柳井 まず、誤解してほしくないのは、私たちは、決して女性歯科医を中心にした歯科医療をつくっていこうと考えているわけではないということです。現状においては、女性歯科医の知識等のレベルアップが必須であると考えている



ため、WDAIを女性限定の組織にしたのです。

これからの歯科医療の発展に男性も女性も関係ありません。重要なのはネクストジェネレーションをいかに育てるかです。

患者ニーズに応じて、国民の健康増進に寄与するために、歯科医に求められているのは、基礎から臨床、そのステップを1つずつマスターしていくことです。現状として、そのキャリアを積んでいる女性歯科医が少ないので、まずはそれを引き上げていきたい。その研鑽の場としてWDAIがあると考えています。

今後の活動の結果、将来的に現在の男女差が解消されれば、WDAIの門戸を男性歯科医にも広げ、本格的なネクストジェネレーションの育成に取り組んでいくことも見据えています。

——最後になりますが、インプラント治療に取り組む開業医の先生方に期待すること、求めることなどはございますか。

柳井 どんな治療においても同じですが、医療技術は日々進歩しているのです。研修会などに積極的に参加して自分自身のスキルアップ

に継続的に努めてほしいと考えています。

また、訪問歯科診療に取り組んでいる開業医の先生には、是非、インプラントの知識等を身につけていただきたいです。もちろん、身につけている方もおられますが、その数は足りていない状況です。今後、インプラントを有する患者さんに適切に対応することは、訪問歯科診療に欠かせない役割です。

もう1点、インプラント治療においては、クリニックでは対応できない難しい症例もあります。それが高齢者となれば、全身的な疾患にも配慮して進めなければならない。そのなかでは、ためらわずに専門病院と連携してほしい。それが患者さんのためでもありますし、インプラント治療の全体の信頼を高めることにもなります。

インプラント治療は国民の口腔内の健康と適切な食生活を守る重要な治療です。歯科医だけでなく、関係する専門職も含め、歯科業界全体が一丸となって、それをサポートするような環境ができれば嬉しいです。(平成30年6月26日/構成・本誌編集部 佐々木隆一) 